

舞鶴市廃棄物減量等推進審議会（第8期）第6回会議 摘録

【日時】令和7年12月23日（火）午後2時00分～午後4時00分

【場所】市役所別館6階 大会議室

【出席委員】山川会長、青山副会長、佐藤副会長、尾上委員、木谷委員、小谷委員、品田委員、谷口委員、寺島委員、永野委員、森委員
（12名中11名出席、有効に成立）

【事務局】市民環境部長：吉田、同次長：大谷、生活環境課長：有田、同主幹：吉田、環境施設課長兼清掃事務所長：清水、リサイクル事務所長：志摩

【傍聴者】なし

1 開会

2 議題

(1)「住み続けられる持続可能な地域」について

①有田課長から資料1-1～1-6について説明

②質問・意見

（山川会長）

立番について、前回の議論を見ながら、踏み込むべきポイント等ご意見を伺いたい。

（谷口委員）

立番のポイントに違和感はないが、高齢化を見据えた議論をしたい。変化する社会に対応した内容があってもいいのではないかと。私達も15年経てば高齢者になる。今の暮らしのまま考えるのではなく、高齢化したらどうなるかという目線が必要。ごみを排出する力が衰えることで、集積所へ持っていくこと自体が課題となる。立番の廃止はゴールではなく、今後の展開を見据えて将来の暮らしと連動した話し合いが必要。

（山川会長）

ライフスタイルの変化や高齢者への対応という長期視点だと思う。その対応として具体的な課題を挙げているが、中間見直しで「長期的将来的なライフスタイルの変化」、あるいは「地域の状況変化に対応した取組の検討」を新たな項目として入れたらどうかと話である。新しい項目を立て、より将来的なビジョン、方向性を検討する項目を入れるといいと思うが、事務局で何か困る点があるだろうか。

（有田課長）

高齢者のごみ排出支援や、不燃ごみを月2回収集するよう拡充するなど対応してきたが、そうした将来ビジョンを捉えた視点は必要だと思う。

（青山副会長）

将来を見据えることは重要だと思う。私はニューヨークの近くに住んでいたが、郊外のある街のキャッチフレーズは「帰ってきたくなる町」。子育て、仕事、住民が作るシステムが非常にうまく回り、住み替えのルーティンで高齢者になれば、息子娘さん夫婦がすぐ隣に住居を構えている。当初は2万人の街を作る予定だったが、今6,000人が住んでいて、未だに小学校が廃校になっていないし、広場や運動場に子供が沢山いて、娘息子たちの帰って来たい街になっている。その街では、ごみのシステムや、娘息子たちが高齢者の見守りをしている。さらに若年層は、子供を作り子育てをする環境もあるから多様な意味で興味深い街である。

舞鶴はそういう意味でどうなのか自分にはわからないが、一般的に高齢化しているのは中心市街地の真ん中ではなく、以前はバスが通っていた新興住宅地で、75歳以上が3割を超え、50歳以上が50%を超えている街が多く発生している。中心市街地は利便性があり、住宅を建替えて経済的にもよく動いているが、郊外団地はバスがほぼ停止している。免許返上した人は、タクシーを利用しなければ外出できない。高齢者にはごみを出す問題があり、継続して住む事ができず空き家が増えている。帰ってきたくなる町にするなら、その面も考えなくてはいけない。

（山川会長）

他に何もなければ、立番については資料のポイントで進めることに審議会は了承で、加えて長期の視点で検討すべきことを書くことで進めたい。

次のポイントはごみの適正処理について。まずは処理体制として資料に新たな広域化の話がある。

(尾上委員)

広域化の検討については、周辺市町と相談しないと記述はできないと思うが何か共通の取り組みが出てきてもいい頃と思う。ごみ処理場の改修は莫大な予算がかかるから、時間がかかるのは間違いないが、連携を強めて方向性ぐらいは固められないかと思う。

(有田課長)

施設の広域化は北部5市2町の集まりでも、具体案や方向性は出ていないが、福知山市が今年度広域化についての検討をする予算化をしたと聞いている。意見交換をする中で、検討が必要と話をしているところ。

(青山副会長)

広域化は必要だと思うが、その施設をどういう形で整理していくかを、役所同士で話をするだけではなく住民を巻き込むことが大事。長野県で広域化の処理施設を作ろうとした際に大きな反対運動がおこった。案を一から作り直すと、これまで7年かかったのが20年かかるのではと危惧していたが、住民参加により3年でできた。議論などを情報媒体で流す住民参加の例として今でも取り上げられる事案。ごみ収集車の走行距離が伸びることから、環境のために広域化をするのにごみマイルージが増加して本末転倒だという議論もあった。そのことを配慮して広域化を進めていただきたいと思います。

(山川会長)

広域化の検討を入れることについては特に異論ないが踏み込んだ話が必要。また、広域化を検討するには、住民参加や環境負荷なども考えて検討すべきということ。

続いて環境美化について。海洋プラスチックへの対応と環境美化の推進が書かれている。海洋プラスチック問題では、プラスチックスマート、ビーチコーミング等々。毎年の取り組みでアダプト里親制度やクリーンキャンペーン。基本計画に何か加える又は変更すべき点について意見いただきたい。

(佐藤副会長)

まいづる環境市民会議では、環境に優しい持続可能なまちづくりを目指した取組を行っており、地球温暖化防止プロジェクトチーム、循環型社会プロジェクトチーム、生物多様性プロジェクトチーム、クリーンキャンペーンプロジェクトチームという四つのチームを中心にして活動している。今年、大浦小学校の環境学習のサポート、それから亀岡の海ごみ使節団との関係もあり、海ごみ調査活動の中心になっている方が在籍している団体を表彰した。

(尾上委員)

教育機関との連携も重要なので文言として記載してはどうか。

(有田課長)

学校や地域団体との連携は実際にやっており重要と考える。文言に入れていきたい。

(山川会長)

環境教育はずっとされているはずで、その記載があればいいと思う。海洋プラスチック対応の箇所に「海洋関連機関・団体等と連携」とあるが、明示的に「教育関係団体や地域団体」を入れて積極的に取り組んでほしい。

(永野委員)

ごみに対して、適正処理とごみを減らすという二つの視点が必要と思っている。発生抑制によるごみの減少も、連携して取り組み発信し、実施することを積極的にしていく。私も海のごみ拾いをしているが、釣りやサーフィンの方が捨てたごみより、町から発生したごみが海に流れ着くのが7割から8割。海に直接関わらない人も無関係ではないことをもっと啓発する必要がある。海辺に住んでいる私達が感じているので、他に住んでいる方と一緒にやって取り組んでいく必要があると感じている。

(青山副会長)

舞鶴市の海洋ごみの調査をしたことはあるか。海岸や砂浜に流れ着いたごみの量と種類など。

(有田課長)

大学と連携しデータをいただいた形で調査結果がある。他団体の調査や、民間で行われたこともある。

(青山副会長)

可能なら2年かけてごみの量と種類の分析を提案したい。企業系と家庭系と観光から出たもの、分類不明のものがトン数で出ると、市民に働きかける材料になる。昔、国土交通省からの委託で伊勢湾で漂着ごみを1年かけてサンプルと写真を撮り、計量と分類を行った。半分近くは都市側か

ら出されたごみだった記憶がある。我々の生活環境全体を壊す要因だと体系的なデータとして出せると、画期的じゃないかなと思っている。

(山川会長)

うちではやってないが、環境省は全国的に漂着ごみと漂流ごみの調査をしていて日本海側の数箇所で行っていたと思うが、この辺はなかったと思う。

(青山副会長)

小学校と中学校に協力してもらい、エリアを各学校に分担して調査してもらい、面積に換算してどれだけのごみの量があるのかを市民に啓発するのも効果的だ。

(山川会長)

同志社大学が漂着ごみを種類ごとに分類した事例があった。ビーチコーミングなどで集まったごみは種類ごとに量の測定をしているか。

(有田課長)

現在はしていない。

(山川会長)

どんなごみが多く漂着するかを伝えるため、活動の際は調査をしておくで広報しやすい。環境省も漂着ごみのQAを出している。ごみを生まない話にも関わっている。「①海洋プラスチックへの対応」にある「発生抑制」はごみを生まない意味か、流出させないという意味なのか。

(吉田部長)

流出させないという意味。

(永野委員)

市民の最終処分場が満杯になることへの危機感はどれほどなのか。あと12年ほどで最終処分場が満杯になると思うが、どれほどの市民がご存知なのか。暮らしてたら当たり前にごみが発生して捨てられるので危機感を持ってないと思う。

日本全体でも20年くらいで処分場が満杯になる話を聞いたことがあるが、処分場の期間は感じにくい。見える化すると自分事として捉えられ、ごみを生まないように暮らしにシフトして行く。ごみの適正排出よりも生まないことにポイントを変え、啓発するべきではないか。

(吉田部長)

買い物ゲームを紹介している。沖縄で生まれたゲームで、沖縄は自慢の海にごみを埋め立てている。ポイ捨てごみは川に流れて海洋ごみになっている。散乱ごみだけでなくごみを削減する広報が必要で、記述を工夫する方向でお預かりさせていただきたい。

(山川会長)

公平受益者負担についてご意見はないか。

ーなしー

(2)「市民・事業者・行政の連携・協力」について

①有田課長から資料2-1、2-2について説明

②質問・意見

(青山副会長)

この取組について中間支援を行うような団体は舞鶴にあるか。

(吉田部長)

実態としてはない。

(青山副会長)

スウェーデンのマルメという町にフードロスについて学ぶために行ったところ、多くの活動を確認した。役所、企業の双方が資金をかけ、協力して取り組んでいる。全てつながり効果的に動いている。そういう形が舞鶴でも作られるといいが。

(吉田部長)

団体はないといったが、京都府がパートナーシップをやっており、森さんが把握しているかもしれない。

(森委員)

直接的に支援をする中間支援組織はない。私も課題と感じている。

(山川会長)

環境市民会議はそういう側面はないか。行政の方も関わっているし、事業者の方かは存じないが審議会にも関わっていただいて、自治会を支援する意味での中間支援的なことはないのかと思ったが。

(吉田部長)

結果的に他団体と事業所を繋いでいくような役割を果たしているとは思いますが、そこにフォーカスした活動をしている団体とならないかもしれない。

(青山副会長)

マルメの団体に話を伺うと、環境問題にも色々な分野があり、ごみ一つとっても多種多様な専門家が必要になってくる。アドバイスできるスタッフを揃えて課題箇所に派遣し指導することをやっていると聞いた。フードロスだけ聞きに行ったら、びっくりするぐらい面白いことをしていたので、こんな団体を日本で育てないといけないと思った。

(山川会長)

気候変動関係は中間支援的な活動をしている組織はあるようだが、ごみでやってるところはないと感じる。コミュニティの維持・活性化もご意見いただければと思う。環境美化、資源ごみ自主回収についても地域団体、テーマ型コミュニティ双方に広げていく話があったが、中間支援が活躍すると思うと思うがご意見はどうか。

(佐藤副会長)

立番の任意化、集積所の管理ルールの整備について今回見直していくこと、任意化していくタイミング的にも適切かと思うが、一気には難しいと思う。地域の実情に応じた集積所の管理ができるよう管理ルールを整備するとなっているので、それをしなければいけない。しっかり自治会に降ろさないと混乱する。

(品田委員)

高齢化が進み地域行事に出られない方も増え、組織から脱退したいとの声を聞くこともあり緊急課題だと思う。自治会の中でごみの立番についても、高齢者が増えている地域、まだ若い人がいる地域がある。その地域を改編して、出やすい地域から立番にでてもらう必要性を感じる。私の自治会では80歳になると立番を免除してもらえる。自治会でも立番の問題を検討している。立番は勉強する場でもある。私が立番をした時エンジンオイルが捨てられていて、買った会社へ持って行くのではと、資料を見たり看板を見ながら互いに相談し合っていた。そんな機会がなくならないよう自治会で考えなくてはと思う。

(山川会長)

ごみ問題は地域で避けられない。みんなで対策することが地域コミュニティの醸成に繋がる側面もあるので、立番ではなくてもどう地域の中で関わっていくのか工夫が必要だ。

(谷口委員)

資料2-2は、自治会のあるべき形を見せている図だと思う。現状、個々の分野だったものが連なる形で示されていて、コミュニティの関係者からすると、円のように丸くするにはどこから始めるのかと思う。どこが旗振りを始めるのかについて想定があれば教えて欲しい。

(吉田部長)

コミュニティの政策面でやっている現状をお伝えをしている。資料のことをごみ処理基本計画に反映することは、現時点では無理だと思う。計画を多少マイナーチェンジすることはあっても進捗を待ちたいと思う。日夜悩んでおり、実際に自治会からは解散をしたいという話は毎日のようにある。立番もその解散理由の原因で、自治会を維持する方法や何が障害になっているのかなど、相談に乗りアイデアを出している現状。

地域運営組織のように小学校単位の大きなイメージを作り、防災などの業務は大きな協議会が担い、ごみ関連は個別の自治会で管理するのかと個人的には思っている。その上で事業の仕分けをして、大きなユニットでできる部分と、既存の自治会でする仕事の整理、つまり運営するための概念整備の段階だと理解してもらいたい。委員が言われるどう繋がるかというアプローチは検討しており、やってみようという地域が出てきているので、伴走しながらその様な自治会を探している状況。

(谷口委員)

ごみの話だけでなく、高齢者問題や子供の見守り、虐待防止など色々な輪がある。生活環境分野で私達はごみ減量の視点で包括しているが、もっと多くの課や、地域の多種多様な団体が関われると思う。私も子育て支援メインだと言いながら介護や他分野の方と関わって動き、高齢者の

こともする子育て支援の人になっている。何かに取り組んでいくことに地域活性化のイメージも加えて視野を広げていく含みが記載内容にあっても良いと思う。

(山川会長)

長期目線だとしてどうしていくのかという話と密接に関わる話題かと思う。実際に市民協働推進課の動きを情報共有しながら、ごみでどのような事ができるのか考えなければならない。

(吉田部長)

横串を刺す動きは今年度やっていて、各課から自治会に依頼する業務の棚卸することで整理していて、自治会にこれ以上の仕事をお願いするには限界があることから、今回ごみ審議会でやってもらう立番の任意化が実践されると最大の棚卸しになるのではと思う。

(山川会長)

立番の変化は非常に大きなインパクトを持つ取り組みになると思う。

(谷口委員)

自治会のあり方について、市民の感覚はどのようなものか。自治会の機能も弱くなり今までとは違う。自治会には従わざるを得ない拘束力めいたものがあり、あり方が問われている。市民感覚に浸透するようなことはあるのか。

(吉田部長)

自治会長に話しても自治会員には伝わらないと言われる。年に1回自治会長のつどいを開いても、そこで話されたことを自治会長は知っていても自分は知らないと言われる。どういう方法があるのか検討し、回覧板をデジタル化する話が出てきている。広報手段で何をするのか予算協議でやっている。

(青山副会長)

市に関連する組織があり、それを横繋ぎにして活動しようと計画段階で止まっているが、民間の趣味の会やスポーツの集まりなどに「こんなことはできませんか」と話してみることはできないか。組織には存在意義があるが、それ以外にも関心を広げてみよう働きかけてみる。いきなりやってくださいは無理があるので、やってもいい、やれるスペースがあると言う団体のパワーを借りながら、民間組織の力を繋ぐ方法はあると思う。

(谷口委員)

中間支援できる人がそれを生業にできない中では、中間支援団体になるのは難しい。

(青山副会長)

コミュニティワーカーとして動ける人は本当にすごい。ヨーロッパではソーシャルイノベーションといって地域に入り、その中で中間支援的に多くの人と組んでデジタル化を以てサポートする人を育てる大学があり、社会問題を支援する人を育てる仕組みができて、その仕事をビジネスにしている。日本はそこが遅れていると思う。

(谷口委員)

国の支援があった頃は、コミュニティワーカーが動き地域支援活動が行われたが、その人材が地域を興していく中で内容が小さくなり、現場が混乱するとかお金が切れたらそれで終わりなど、人材が成熟する前に終わってしまう。心ある方が地域の繋がりを形成されているのが現状だが、そんな人も少なくなっていく。責任感として自分のことはやり、いざというときは協力しようように育ってきたが、今はそう育っていない人が大人になり、同じ感覚のままではつながりを形成できない未来も想定しなければならない。

ごみ出しを自治会に任せているが、業務を楽にする立番の任意制だけでは、自治会はなくなるという将来に備える議論をしていないように思う。どう動くのか私もわからない。私も高齢者になりそうな一人だが、変わる時代にどう備えるか、地域について話し合い活動する人材をいかに育てるのか。この先の議論で盛んになれば、市役所の職員任せではなく、委託のような形で仕事としてできる形が生み出されるかもしれない。

(山川会長)

昔は自営業の人が地域ビジネスと関わりながら人間関係を作り支えていたが、今は少なくなってきた。

(青山副会長)

ヨーロッパ諸国でも色々な社会問題が出ている。ごみ問題、高齢化の問題、介護の問題、子育てなど。それを地域でどう解決していくか。ポルトガルがその問題に対し積極的に政府が支援する体制を作りつつある。加えて大学と地域の色々なプロジェクトの人が加わり、面白い展開をしている報告を聞いた。それをビジネスとして成果が出せる基盤を作ることが重要だが、計画にそ

こまで入れるのは無理なので、そういう動きがあることを委員に知ってもらうのも重要だと思う。龍谷大学にいた頃、久御山町の全自治会にヒアリングして抱えている問題を聞いたが、舞鶴と変わらないかもっとひどい状態だった。久御山町では自治会長になると、手当として毎年12万円の給付があるがなり手がいない。コロナでイベントがほとんど中止になり、コロナが収まってもほとんど復活していないという。また農業が盛んで、何かをうまく組み合わせられないかとか、昔から持っていた文化と社会活動をうまく繋げられないかとか色々な方策をしていたが、自治会も積極的な自治会とそうでない自治会が半々の雰囲気。だからデジタル化しようと提案したがなかなか進まない。

(山川課長)

育った環境、人間関係、インフラも全然違う中で、将来どうすれば持続可能で進むのか、長期的な視点で考えなければならない。最終的には市の総合計画に色々な分野から持ち寄ってアイデアを出し合い連携して動かないといけない。どこまで書けるか難しいが、その視点を踏まえた検討課題を位置づけて書いてもらえればと思う。

(尾上委員)

今日マスタープランについて話し合ったが、同じような話題で自治会の存続が難しくなっている。周辺の集落をネットワークでどう繋げるんだとか、都市計画でいうと構造を変えようとすぐにやりたがる。私もそのタイプの人で、構造をドラスティックに変えていかないと、中間ですくい上げる組織がない限り難しい。資料の円形になっている図を見ながらどういうふうに書けるのかよりも、将来、横串を刺した組織で話し合いを進められるのか。もし載せるなら「このように議論を進めます」みたいなことしか書けないだろう。

(木谷委員)

地域関係の仕事をしており、地域に密着しなければならないが、現実的に難しいと思っている。消防団も協議会も皆高齢化で、ほぼ同じ人で構成されていて担い手がない状況。家事・育児・介護などの社会生活の基盤を支えるシャドウワークをする人も少なく、ケアマネが目をつぶってやっている。担い手を若い頃から育てる働きかけは必要で、きっかけを作らないと、組織をいくつか作っても破綻していってしまう。先日、ある地域でスポーツ競技大会（モルック大会）を地域限定で行った。年齢を問わず募集したら、若い人からお年寄りまで集まり活発にやっていた。そこで初めてこんな人が地域にいると知った。私達も自分の目線の人間だけで集まるのではなく、多様な場面で働きかけた方がいいと思う。うちの法人に保育園があるが、子供服のリユース会を実施したらすごい反響だった。好評だったので法人ではこれを継続したいという働きかけもある。いろいろな働きかけを増やしてほしいと思う。地域を支える人が少なくなると、多様な箇所に波及することがこの図を見て感じるのだから、そんな働きかけも検討してほしい。

(吉田部長)

オレンジの線が人口ではなく人交の意味として、人は少なくなっているがこの図を構造概念として捉えて欲しい。支援型の組織同士の繋がり方を模索しているとご理解されたい。今の議論を総合して、ごみ処理基本計画の中に、リデザインとして、コミュニティがどうあるべきかと考えるため、切り口としてごみのテーマで対話する場を促進するのとらえ方をした。あとで事務局にて精査をしたいと思っている。

(3) その他

(有田課長)

今後の予定について説明します。5月以降4回に渡る審議で様々なご意見を頂いており、これをまとめた答申の案を作成し、事前に皆様へ共有の上で、3月に内容についてご意見をいただく審議会を開催します。来年の4月以降に答申をいただいた上で、パブリックコメントを経て、秋頃に計画策定という流れを予定しています。

(山川会長)

今後の予定について何かご質問はないか。

ーなしー

(4) 閉会

(吉田部長)

ひととおりマイナーチェンジに向けた議論は済んだ。いよいよ文章化していくことが次のフェーズ。3月にそれを配布するまでに、部分的にでも何か皆さんへお示しできるといいと思うので、相談をしながら進めていきたい。今日の話にもあったとおり、ごみの話はごみに留まらず色々な地域の問題に関わるのだと、聞いていて改めて深く実感した。他の部署とも話をしながら完成に向けて頭を使っていきたいと思う。